癒されぬトラウマ
——Tim O'Brien の *In the Lake of the Woods* を中心に——

的 場 いづみ

序

ヴェトナム戦争は今なお米国社会にとってのトラウマとして存在する。それは米国にとって初めての負け戦であっただけでなく、国内の世論を二分し、政府の方針に対する懐疑の念を米国民に生じさせ、負の遺産としてその後の米国における外交政策・軍事政策に影響を与え続けている。90年代初頭には湾岸戦争の勝利により、ヴェトナム戦争の忌まわしい記憶は払拭され、一見トラウマは癒されたかのような印象が与えられた。しかし、湾岸戦争後もイラクの指導者としてサダム・フセインが君臨し続ける事実は、米国の価値基準とはまったく異なる価値観がイラクに根強く存在することを示し、米国を中心に流布した、フセイン＝悪者という勧善懲悪のシナリオに疑問を生じさせている。加えて、最近のテロ事件の背景として、湾岸戦争時/後の中東での米軍駐屯の問題等を含む強い反米感情が指摘されており、湾岸戦争の語られ方は修正を迫られている。さらに、軍事力行使が長期化する予測には、つねに泥沼化したヴェトナム戦争の記憶が伴う。

80年代はヴェトナム戦争の傷を癒そうとする動きが多方面に現れた時期である。戦争記念碑が建立され、ヴェトナム戦争に関連した映画が数多く製作され、帰還兵を中心としたオーラル・ヒストリーの出版も相次いだ。こうした動きの中で、ヴェトナム帰還兵の苦境は繰り返し語られ、犠牲者としての米兵像が強調された。それは、60年代末から70年代初めに繰り返

し語られた、米空軍のナパーム弾投下による村や森の焼失や、赤ん坊や老人を含む一般市民の殺害といった、加害側面を強調した言説に対する、大きな揺り戻しとして理解することができる。

しかし、ヴェトナム戦争に関わった若者たちを犠牲者として認識することで、果たしてヴェトナム戦争が米国社会に与えた傷は癒されるのであろうか。本稿では、1994年に出版された Tim O'Brien の *In the Lake of the Woods* を分析の中心に据え、それを米国におけるヴェトナム戦争のトラウマの語られ方と比較することによって、この長編小説が80年代以降のトラウマをめぐる言説に対する批判として機能している点を考察する。

ヴェトナム戦争に従軍した経験をもつ O'Brien は *If I Die in a Combat Zone, Box Me Up and Send Me Home* (1973)、*Going After Cacciato* (1978)、*The Nuclear Age* (1985)、*The Things They Carried* (1990)、*In the Lake of the Woods* (1994) とヴェトナム戦争をめぐる小説や随筆を70年代から90年代に至るまで執筆し続けてきた小説家である。特に *In the Lake of the Woods* は、80年代の米国におけるトラウマの語られ方が随所に織り込まれつつも、距離を置かれる構造になっており、80年代以降の米国でのトラウマの語られ方に警鐘を鳴らしていると考えられる。

John のトラウマ

In the Lake of the Woods は、ある夫婦の湖畔での失踪事件（最初に妻の失踪、そしてその一ヶ月後に発生した夫の失踪）の謎を、匿名の語り手が解明しようする謎解きの物語の形を取っている。妻の失踪については、政治家として失脚したばかりの夫 John Wade に妻殺害の疑いがかけられた。妻失踪の謎を解くためには、夫の動機を検証する必要が生じる。その結果、失踪事件の謎解きは、夫のトラウマを明かす謎解きへと転位する。

John の人格に沈潜するトラウマは、主として、14歳のときにアルコール依存症の父親を自殺によって喪ったという体験と、ヴェトナム戦争に従

軍した21歳のときにソンミ事件に関与した事実に起因する。

ソンミ事件とは、周知の通り、68年3月16日に起こった南ヴェトナムのクアンガイ省ソンミ村ミライ地区での米陸軍部隊による村民の虐殺事件であり、殺害されたヴェトナムの非戦闘員の数は米国内の裁判記録では109名、米国陸軍による別の調査書によると343名であり、また、ヴェトナムのソンミの記念跡地に建立された碑には504名の名前が刻まれている。事件が発覚し、調査の対象となったのは事件発生後1年以上経ってからであり、村民を殺害した中隊の指揮官 William Calley 中尉は、事件発覚後、軍法会議にかけられ、終身刑の判決を受けたものの、後に Nixon 大統領によって釈放され、75年には、上官の命令に従っただけという弁明が認められて無罪となる。ソンミ事件はヴェトナム戦争史における、米軍の残虐行為を象徴的に示す、米国民全体にとってのトラウマとして、記憶と忘却を繰り返す歴史のメカニズムの中を彷徨している。

小説において John は Calley 中尉の率いる中隊に所属すると設定される。John は Calley を中心とする大量殺戮に加わる意思はなかったものの、その場に立ち会いながらも大量殺戮を止めることもできず、それどころか、その場の邪悪な狂気に呑み込まれて一人のヴェトナムの老人を殺害し、さらに一人の米兵を緊迫状態における反射的自己防御のために誤射するという極限状況を体験する。二人の人間を意に反して殺害し、結果的にはソンミ村における大量虐殺の一端を担ったという罪意識とそのトラウマを、John はひたすら忘却することで乗り切ろうとする。

ソンミ事件への関与、そして、父の自死という双方のトラウマを克服する方法を、John はともに「トリック」という同一の言葉によって認識する。この事実は、二つのトラウマが別々に存在するのではなく、同一線上に位置することを如実に物語る。

「トリック」という語は10歳の頃から John が熱中した手品という趣味に起因するが、14歳の時に体験した父の自殺を契機として、トリックは彼の人格形成と深く関わるようになる。父の死後もなお父からの愛と承認を

求める John は、心の中にトリックを仕掛け、父が死んでいないふりをし、想像上の父から愛と承認を得ようとする。その操作はあくまでも手品の「仕掛け」であり、本物の「魔法」ではないために、父の死という現実自体を変え得ないことを John は自覚しており、この時点では現実と非現実の世界の混同は見られない。つまり、父の自死によって、父からの愛と承認の機会を奪われた John は、父の死を否認し、自らで自分を承認する。その承認はあくまでも父からの承認の代替物であり、虚構でしかない。そのため、それは一時的な避難でしかない。父の死を否認するというトリックは、自分の感情をコントロールして現実の困難に一時的に適応して生き延びる手段として使われる。

現実の困難に適応して生き延びる手段であったトリックは、やがて支配の手段へと変容する。それは、父の自殺というトラウマを、そして戦場における殺害というトラウマを抑圧し、自分の感情を支配する手段であるだけでなく、無力な自己と忌わしい記憶を隠蔽し、自分の肯定的なイメージを肥大させ、他者にそのイメージを信じさせる方策となる。支配の対象は自己のみにとどまらず他者にも及ぶ。たとえば、John は子どもの頃には父を、そして学生時代には恋人の Kathy を尾行し、彼らの秘密を知り、支配しようとする。トリックは周囲の世界を支配する手段となり、奇術のトリックによって味わう John の全能感は次のように語られる。

> As a boy John Wade spent hours practicing his moves in front of the old stand-up mirror down in the basement. He watched his mother's silk scarves change color, copper pennies becoming white mice. In the mirror, where miracles happened, John was no longer a lonely little kid. *He had sovereignty over the world.* Quick and graceful, his hands did things ordinary hands could not do—palm a cigarette lighter, cut a deck of cards with a turn of the thumb. *Everything was possible, even happiness.*

> In the mirror, where John Wade mostly lived, he could read his father's mind. Simple affection, for instance. "Love you, cowboy," his father would think. (*Lake* 65, italics mine)

ここで、奇術は世界を支配する手段であるとともに、幸福を生み出す手段として語られる。そして、John にとって政治は奇術と同様、物事を変えて、幸福を生み出す手段であることが、繰り返し示される。奇術と政治とが支配への欲望として通底するのであれば、John は子どもの頃から大人になるまでトリックによって世界を支配し、ものごとを変えようとしてきたことになる。そして、トリックによって世界を支配するという欲望は、他者によって—父、Kathy、そして人々によって—愛され、承認されたいという動機に貫かれる。

とは言え、動機と行動の関連は、John の場合、少し複雑な様相を呈する。子どもの頃の奇術は想像上の父からの承認を得ることが主たる目的であった。では、政治でものごとを変容させようとする目的は何だったのだろうか。大学 4 年生の John は政治家になる夢を19歳の Kathy に語った後で、彼女から彼の夢はすべて計算済みの操作のようだと指摘される。そして、彼自身、政治は確かに「操作」であり、操作があるからこそ政治は面白いのだと自覚する (*Lake* 35)。「操作」は他者を支配するトリックの一種であり、John にとっては何かを成し遂げる手段としてトリックがあるのではなく、トリック自体が自己目的化していることになる。トラウマから一時的に抜け出す手段であったはずのトリックが恒常的に自己目的化し、他者に愛されたいという動機は意識化されないままにトリックのみが増殖し続ける人生を John は生きることになる。

消失へと至る愛

手品には無から何かを生み出すトリック同様、存在していたはずのもの

を消し去るトリックもある。物語のレヴェルではこの消滅のマジックは、Kathy の失踪に続く John の失踪によって完結する。しかし、消滅のマジックは、彼がヴェトナムでみつけた 2 匹の蛇のエピソードとして小説内で反復され、John の Kathy への愛の本質を、さらに他者を理解することの不可能性を象徴的に語る。

> He compared their love to a pair of snakes he'd seen along a trail near Pinkville, each snake eating the other's tail, a bizarre circle of appetites that brought the heads closer until one of the men in Charlie Company used a machete to end it. "That's how our love feels," John wrote, "like we're swallowing each other up, except in a *good* way, a perfect Number One Yum-Yum way, and I can't wait to get home and see what would've happened if those two dumbass snakes finally ate each other's heads. Think about it. The mathematics get weird.... And I love you, Kath. Just like those weirdo snakes—one plus one equals zero !" (*Lake* 61)

自らの尾を貪る一匹の蛇はウロボロスとして知られており、それは終わりが始まりへと転化するために循環する円環であり、永続性と無限を表す。互いの尾を貪る二匹の蛇もまた、永続的な円環となり得るが、ここで注目したいのは、個と個の融合の願望と融合による個の消失の願望が強調されることである。John は時々、Kathy の体内に入り込み、彼女の心臓に彼の歯を食い込ませ、二人の生命を縫い合わせたいという願望を感じる(*Lake* 101)。その異常な所有欲の背景には彼女を失う恐怖があると彼は分析する。彼にも彼女にも秘密があり、彼の秘密の露呈によって彼女の愛を失うという恐怖感と、彼女の未知の部分に未来の別離の萌芽が潜むという疑念が強迫観念として彼をとらえる。恋人の尾行という強迫観念的な行動も、自分を愛されるべき存在と見なす自己肯定感が彼に欠如しているこ

とに起因する。しかし、彼はその欠如を自身の問題として直視せずに、彼女との人間関係の問題へとすり替え、彼女をコントロールすることによって問題解決をはかろうとする。そのため、根本的には解決されず、解決はつねに先送りされる。

John にとっての 1 + 1 = 0 という計算式は彼女の秘密を彼が呑み込み、彼の秘密すなわち隠蔽されたトラウマを彼女が呑み込むことである。ここで呑み込むという行為は全面的な受容であると同時に呑み込まれた結果としての消滅を意味する。受容によって秘密という重荷から解き放たれ、そして消滅によって記憶すらもなくなってしまい、ただ無となる。

しかし、それは John による一方的な愛の概念化に過ぎない。ソンミ事件への関与という秘密を Kathy は全面的には受容できなかった。さらに John 自身も彼女のことを理解していなかったことを、彼女の失踪後に彼は知る。John が Kathy に語る愛とは、独立した個人対個人として互いを尊重し、愛し愛され合う、という愛ではなく、彼が絶対的に全面的に受容され、個と個の境界線すら消失するような愛であり、それは彼が Kathy を愛しているというよりむしろ、彼が絶対的に愛されたいという欲望に他ならない。そして、その絶対的に全面的な受容を求める態度は、子どもが親に受容と承認を求める態度と酷似する。この点において Kathy は John にとって父の延長線上に存在する。

> More than anyone she'd ever known, John needed the conspicuous display of human love—absolute, unconditional love. Love without limit. Like a hunger, she thought. Some vast emptiness seemed to drive him on, a craving for warmth and reassurance. Politics was just a love thermometer. The polls quantified it, the elections made it official. (*Lake* 55)

このように、Kathy は John の底なし沼のような空洞に愛情を注ぎ込み、

しかし、いくら愛情を注いでもその空洞は満たされることなく依然として空洞のまま絶対的な愛情を求め続けるために、Kathy は愛することに疲れ果て、自己崩壊の危機に瀕していたことが浮かび上がる。1 + 1 = 0 という計算のからくりは、果てしない空洞を抱えた個人がその空洞に愛情を注いでくれる他者の存在によって、かろうじて自己の存在を保っていたにもかかわらず、その他者の全エネルギーを貪欲に空洞へと呑み込んでしまった結果、愛情を注いでくれる他者を喪失し、自己を支えることができずに空洞すなわち 0 のみが残存するとも考えられる。

しかし、他方でこの 1 + 1 = 0 という計算式は John と語り手の関係を暗示する。語り手は一見、失踪事件の解明を求めているように見える。しかし、Tobey Herzog は John と語り手の関係を理解するために、Conrad の *Heart of Darkness* における Kurtz と Marlow の関係を並置し、語り手が解明しようとするものは対象の心に潜む謎である点が類似していると指摘する (157)。Kurtz の心の闇を明かそうとする Marlow の試みは、Marlow 自身の心に存在する闇をも照射する。*In the Lake of the Woods* の語り手は Tim O'Brien 同様、ソンミ事件の 1 年後に事件の起こったソンミ村ミライ地区に従軍した経験をもつ帰還兵である。それゆえ、John の心の闇を解明しようとする語り手の試みは、同じミライ地区にもし事件時に居合わせていたら語り手はどのように対応したかと仮定する自問へと置換され、John のみならず語り手自身の心の闇を解明する試みへと横滑りする[(1)]。そして、語り手は、John の心の闇を解明することはできないという否定的な結論に達する。

> *Aren't we all? John Wade—he's beyond knowing. He's an other.* For all my years of struggle with this depressing record, for all the travel and interviews and musty libraries, *the man's soul remains for me an absolute and impenetrable unknown,* a nametag drifting willy-nilly on oceans of hapless fact. Twelve notebooks' worth, and

more to come. What drives me on, I realize, is a craving to force entry into another heart, to trick the tumblers of natural law, to perform miracles implacable otherness of others. And we wish to penetrate by hypothesis, by daydream, by scientific investigation those leaden walls that encase the human spirit, that define it and guard it and hold it forever inaccessible. (*Lake* 101, italics mine)

語り手の投げかける "Aren't we all ?" という問いは "Aren't we all beyond knowing ?" という問いである。それゆえ、知性による理解を超えた John を他者と呼ぶならば、われわれもみな不可知な他者という結論が導かれる。つまり、John の心の謎を知ることによって自らの心の謎を知ろうとした語り手は、John の心も自分の心も知りえない、すなわち 0 なのだという結論に達したことになる。

物語を語りながら、その物語の帰結が 0 であると語り手が述べる問題については、後で再び立ち戻るが、ここで *In the Lake of the Woods* におけるトラウマの語られ方が、それ以前—特に80年代—のトラウマをめぐる言説の流れの中でどのような位置にあるかを確認したい。

ヴェトナム戦争映画に見られるトラウマ

トラウマという言葉を、「心に加えられた見えない傷」という意味で精神医学の用語として用い始めたのはフロイトであり、「激しい物理的な衝撃、列車の衝突や、その他の生命の危険と結びついた災害にあった後に」現れる精神症状として、彼は「外傷性神経症」(Traumatic Neurosis) という名称を1920年に出している。この時期は第一次大戦時と重なり、当時、砲弾の炸裂が脳震盪を起こすための症状と考えられて命名された「シェルショック」が、兵士の資質や道徳的な退廃によって起こるのではなく、心理学的な外傷であることが徐々に認められるようになった時期でもある。

その後、ショック症状がより広範な状況で観察されたため、兵士の戦闘後遺症は戦争神経症という名で広く知られるようになり、第二次大戦の経験によってすべての兵士が戦闘神経症になりうることが認識されるようになる。さらにヴェトナム戦争の帰還兵に見られる戦争神経症の研究から、反戦運動の道徳的正当性と国民的支持のない戦争の敗北という国民的体験とによって、心理学的外傷が戦争の長期的で不可避的な後遺症であるという認識が可能となる。こうした経緯を経て、80年にアメリカ精神医学会は心的外傷後ストレス障害（Post-Traumatic Stress Disorder PTSD）という新しいカテゴリーをマニュアルに加えることになり、PTSD という用語は帰還兵のトラウマやその反応—たとえば、繰り返される悪夢やフラッシュバックなど—に対する理解と共に一般に定着することになる。PTSD という概念は、ヴェトナム帰還兵の傷ついた被害者としての側面を照らし出し、80年代におけるヴェトナム帰還兵の社会的復権の動きを支える役割を果たす。

社会的事象においては82年にヴェトナム戦争記念碑が建立され、壁に犠牲者の名前を彫るという形式によって、記念碑の目的が偉業の表彰ではなく犠牲者の鎮魂にあることが明白に示される。同様の形式を採用した沖縄の記念碑と異なり、ヴェトナム戦争記念碑には米兵の名前のみを犠牲者として刻んでおり、被害者としての米兵という文化的表象は堅固な実体を得るに至る。

80年代のヴェトナム戦争映画においても、トラウマは頻繁に映像で表現される。記念碑が建立された82年にはランボー・シリーズの第一弾である *First Blood* が公開され、フラッシュバックの症状が映像化される。刑務所の窓の鉄格子を見たランボーの想念にヴェトナムで囚われた際に見た格子と、その時に加えられた暴行の記憶が侵入し、現実と記憶の境界が崩壊したランボーは暴れだす。この場面では、刑務所の窓格子の映像とヴェトナムでの監禁場所の格子の映像を交互に差し込む手法により、記憶が現実へと侵入する具体的な様子が映像で表現される。さらに、映画の最後でラ

ンボーは帰還兵の苦境すなわち PTSD の苦しみと社会から冷遇される惨めさを泣きながら訴え、暴力的な異常者と見える帰還兵が実は戦争の犠牲者であることを強調する。とは言え、ランボー・シリーズは本質的にはアクション・ムーヴィーに帰還兵の苦悩を加味しているに過ぎず、帰還兵をハリウッドの商売の材料にすることに対して抗議のデモを起こす帰還兵たちすら現れ、帰還兵たちからの支持は得られなかった。

一方、米軍内の friendly fire を主題とした *Platoon* (1986) では、帰還兵の苦悩は直接には語られないものの、小隊内での軋轢と憎悪という、それまで公に語られなかった秘密が公共の記憶として定着した点や、さらに実戦シーンの迫力によって、多くのヴェトナム帰還兵に自分たちの体験が代弁されたという感覚を与えた点が評価され、帰還兵からもおおむね歓迎された。翌87年公開の *Hamburger Hill* はその激しい戦闘シーンが *Platoon* より実戦に近い、と評価する帰還兵もある。この二つの映画はともに等身大の兵士たちのヴェトナム体験がアメリカ社会に分有されることを促した。そのため、帰還兵を直接扱ってはいないとは言え、この二つの映画は帰還兵のトラウマを癒す動きに影響を及ぼした。

しかし、傷ついた帰還兵とその癒しという問題を端的に表現したのは、88年公開の映画 *In Country* と翌89年の *Jacknife* である。*In Country* は Bobbie Ann Mason による同名の長編小説の映画化だが、映画化の際に主人公の置き換えが行われる。原作では主人公は戦争遺児の Sam だが、映画は帰還兵 Emmett が主人公に据えられる。そのため、戦争を知らない世代へのヴェトナム戦争体験の継承という、原作における中心的な主題は後退し、冷遇されてきた兵士たちの名誉回復の物語へと書き換えが図られる。映画では、帰還兵の苦しみ—やはりここでもフラッシュバックとして表現される—が原作より強調され、さらに、原作にはない、ヴェトナムで戦った兵士すべてを称えるメッセージも加えられる。また、戦後生まれの子世代、ヴェトナム戦争に翻弄された親世代、祖父母世代という三世代の家族の絆が回復される兆しが見える結末部において積極的な役割を担うの

も、映画では Sam に代わって帰還兵 Emmett である。社会から疎外されていた帰還兵が、戦後世代へとヴェトナム体験を伝える経験を通して、自らの自信を回復し、家族の中心へと復帰する物語は、80年代における帰還兵復権の動きを顕著に反映している。

一方、*Jacknife* では帰還兵の社会的復帰と病理学的回復とが関連付けられる。*Jacknife* は、PTSD に苦しむ帰還兵が友人の帰還兵とその妹との人間関係を通して、トラウマを癒す必要に気づくという物語である。人との関わりを通してトラウマが癒されるという物語自体に格別の目新しさはない。しかし、この映画の新しさは、主人公が友人に勧められた自助グループに参加する場面が結末部で示される点にある。自助グループへの参加という終わり方によって、トラウマは精神分析学や臨床心理学の助けを借りて回復しうるのだというメッセージが暗示される。

このように80年代末のこの二つの映画では、ともに結末部で帰還兵のトラウマが癒される兆しが示される。これらを70年代末に公開された映画と比較すると、その違いは明白である。

78年に公開された *The Deer Hunter* では結末部において、戦争で精神を病んだ元兵士の救出が試みられる。陥落直前のサイゴンの賭博場でロシアン・ルーレットを繰り返す記憶喪失の元兵士は、救出に訪れた主人公の努力により、一瞬、過去の記憶を回復したかに見える。元兵士が口にした "One shot ?" という言葉を、主人公は故郷でともに狩をした時に元兵士に伝授した、主人公の狩猟哲学（一発で鹿をしとめる）を思い出した言葉と解釈する。しかし、"One shot?" という言葉に促されるかのように、元兵士はロシアン・ルーレットの銃の引き金を引き、死に至る。元兵士は精神異常のままに死を迎え、救出しようとした主人公の試みは頓挫する。

同じく78年公開の *Coming Home* においても、主人公の帰還兵のかかえるトラウマは癒されたかに見えるが、結末部で自責の念に苦悩する別の帰還兵が全裸で海に入るシーンが挿入される。その入水の意味は多義的ではあるが、十分に死を予感させる。翌79年公開の *Apocalypse Now* にお

いても Kurtz の狂気は回復の見込みが示されない。

70年代末のヴェトナム戦争映画と比較すると、80年代末の映画に示される、トラウマは回復しうるというメッセージの特殊性は明白であり、そうした楽観的なナラティヴは、80年代における帰還兵の社会的復権の動き、および、精神医学や臨床心理学の成果に、その基盤を置いていると考えられる。

アダルト・チルドレンというトラウマ

ここで、80年代から90年代にかけて大きな影響力をもった別のトラウマについての言説に目を転じたい。80年代は PTSD という用語とともにアダルト・チャイルド/アダルト・チルドレンという心理学の用語が広く定着した時期でもある。もともとアダルト・チルドレンは、Adult Children of Alcoholics（略して AC）すなわちアルコール依存症の親のもとで育ち大人になった人たちを意味する。AC は親のアルコール依存の問題によって、親に無条件に愛され、受容されるという子供時代を奪われて育ったために、大人になっても心理的問題をかかえ、現実生活への適応に困難を感じる人々のことである。アルコール依存の問題は依存者本人の問題に関心が集まる傾向が長く続いたが、70年代後半からアルコール依存症者の家族への援助の必要性が徐々に認識され、83年に出版された Janet Woititz による *Adult Children of Alcoholics* によって、その問題が広く知られるようになる。また、アルコール依存のみならず、薬物依存、ギャンブル依存、仕事中毒、夫婦間暴力や児童虐待、さらに親による過度の期待によって機能不全の状態に陥った家族のもとで育った人々にも、同様の症状が観察され、アダルト・チルドレンという用語は広く機能不全の家族に育った人々を指すようになる。80年代後半から90年代にかけては、AC の問題とその癒しについての本が数多く出版され、著名人が自ら AC であることを公表する傾向が現れた。92年には Reagan 元大統領の娘 Patti Davis が AC と

して苦しんだ経験を告白する本を出版し、95年には当時の現職大統領 Clinton がアルコール依存の継父の暴力に耐えた少年時代を女性誌 *Good Housekeeping* のインタビューに応えて明らかにした。こうした著名人による告白によって、AC であると認めることは何ら恥ずべきことではないという認識が米国社会に定着する。

PTSD や AC を認知する動きと連動して、米国ではトラウマ療法の再評価がなされ、92年には Judith Herman が精神医学・臨床心理学の分野に多大な影響を与えた *Trauma and Recovery* を出版した。ちなみに、この研究書は *In the Lake of the Woods* の中でも数回にわたって抜粋され、John のトラウマを理解する手掛かりとして活用される。

こうした、いわば AC ブームの中で、自分が AC だと認識した人が親を糾弾したり、カウンセラーから誤った記憶—たとえば、現実には起こらなかった、親による性的虐待の記憶—を与えられるトラブルも発生し、心理学の研究者の中からもトラウマ療法を批判する声があがるようになる。たとえば Ursula Nuber は95年に出版した著書で、誰の子供時代にも深く傷ついた経験はあるが、それを乗り越えていく強さも多くの子どもは備えており、トラウマ療法はいたずらに人々を幼年時代に呪縛させ続けていると批判する。

90年に執筆が開始され、94年に出版された *In the Lake of the Woods* は、トラウマとその癒しについての言説がこのように量産された時期に執筆され、主人公には帰還兵の PTSD とアルコール依存の父のいる家族で育った AC としてのトラウマが付与されている。John はトラウマをトリックによって隠蔽しようとするが、頻繁に悪夢にうなされて叫び声をあげる事実を Kathy に知られており、彼が抑圧したトラウマが PTSD の症状として現れていることが示される。さらに、AC の問題については、自己肯定が内在化していないために、他人からの肯定と承認を常に求め、周囲から拍手喝采でも浴びない限り、自分が人から肯定されていると感じることができない点や、現実の相手をありのままに見ようとせず、幻想の相手を見

ようとするために、人との親密な関係を築くのが苦手な点、また、コントロールへの欲求が強く、自分がコントロールできない変化に過剰に反応する点に、AC の特徴が色濃く反映されている[2]。

癒しを拒む物語

このように PTSD や AC といった80年代から90年代にかけてのトラウマにまつわる言説の中心となった概念を取り入れながらも、*In the Lake of the Woods* がトラウマについての他の物語と決定的に異なるのは、それが癒されない物語であり、癒しの兆しすら暗示されない物語である点と指摘できる。癒しを拒む物語と呼ぶことすら可能かもしれない。

トラウマを癒すという行為は一見パーソナルな問題であるように見えて、その実きわめて政治的な意味を含む行為であることは、たとえば、従軍慰安婦として働くことを強制された女性たちが、そのトラウマを精神医学なり臨床心理学なりの療法で癒すことが、いかに政治的な含意をもつかを考えれば明白である。臨床心理療法でトラウマを癒すということは、多くの場合、トラウマを個人の生育歴の問題へと還元してしまうために、そうしたトラウマを産出した背景にある、国家あるいは民族といった共同体の力学、そしてジェンダーの力学に何ら損傷を与えず、そうした問題を不問に付して、温存してしまう危険性を孕んでいる。

80年代におけるヴェトナム帰還兵の社会的復権の動きは、ヴェトナム戦争というアメリカ社会におけるトラウマを社会全体が癒そうとした動きであったと言えなくもない。癒しを考える場合、誰が誰に対して、何を目指して癒すのかという問題は重要であり、80年代において、米国はヴェトナム戦争の是非をめぐって分裂した米国民に対して、米国の統合を目指して癒しを行ったと考えられる。PTSD の研究は精神医学・心理学の分野で大きな貢献を果たしたことは明白だが、その研究が帰還兵の被害者、犠牲者としての側面を強く照らし出し、傷ついた犠牲者たちと彼らを癒すイノ

セントなアメリカという神話を補強したことは、否定できない。その際にヴェトナム戦争が侵略戦争としての側面をもっていたことやヴェトナムの被った有形無形の傷は不問に付される。94年に公開され大ヒットした映画 *Forrest Gump* は白痴を主人公として据えることにより、60年代以降の激動の時代をヴェトナムに従軍しながらもイノセントに生き抜く可能性を示す。イノセントな米国像を復活させた映画が米国民に熱狂的に受けいれられたのは象徴的である。

O'Brien は94年に発表したエッセイで、ソンミ事件が忘却の淵へと追いやられていることに触れ、次のように述べる。

> Evil has no place, it seems, in our national mythology. We erase it. We use ellipses. We salute ourselves and take pride in American the White Knight, America the Lone Ranger, America's sleek laser—guided weaponry beating up on Saddam and his legion of devils. (Vietnam 52)

東西冷戦の中、正義の騎士としてヴェトナムに赴いた米軍は、勧善懲悪の基本的構図を温存したまま、役者とストーリーを少し入れ替えることによって91年に湾岸戦争に突入する(3)。

近年の PTSD の研究では、トラウマを引き起こす出来事を体験している最中には、体験者は無感覚になっているので、その出来事を十分に体験していないと考える。それゆえ、十分に意識に統合されなかった出来事は、知的理解というレヴェルに組み込まれ、統合されようと、画像となって、フラッシュバックとして、繰り返し患者を襲うことになる。癒されるためには、断片的な出来事を知的に理解し、意識の中に統合する必要があり、逆に言えば、意識の中に統合しない限り、トラウマは決して解釈され尽くすことはなく、合理化されることも、色あせることも、忘却されることもない。

ここで、1＋1＝0の問題、物語を語りながら、その物語の帰結が0であると語り手が述べる問題に立ち返る。John の謎を解明しようとした語り手は、絶対的な他者性によってその知的理解を阻まれ、その結果語り手は統合された物語を紡ぎ出すことができなくなり（すなわち0）、物語や証拠、仮説が断片的に提示されることになる。

読み手は、断片を意識へと統合しようとするベクトルと、断片のまま放出してしまうベクトルという、相対する二方向のベクトル運動に巻き込まれ、そこに横たわっている、解けない謎に対峙させられる。それは、なぜソンミ事件に関与したのか、という謎であり、小説の終盤において、ソンミ事件をめぐる言説とアメリカ先住民虐殺をめぐる言説が繰り返し併置されることによって、その謎は、なぜ米国人/人は残虐行為を行うのかという謎へと置換される。その謎は解明を拒み、合理化を拒み、癒されることに抵抗し、その過程に立ち会った読み手をもトラウマ的事件に巻き込む謎として存在している

注

(1) O'Brien 自身も語り手と同時期にミライ地区で従軍していた（Herzog 17）。そのため、語り手のレヴェルだけでなく、作者の心の闇をも解明する入れ子細工構造となっている。

(2) O'Brien は Herzog のインタビューに応えて、自らが父のアルコール依存をかかえる機能不全の家族で育ったこと、さらに、その混乱と孤独から逃避するために手品に熱中していたことを明らかにしている（Herzog 8－9）。そのため、AC としての John には自伝的な要素が付与されていると考えられる。John 以外に AC の特徴をもつ登場人物として、幼くして母を喪った Sarah（*The Nuclear Age*）を挙げることができる。

(3) 勧善懲悪という構図の湾岸戦争ナラティヴの構築については Kamioka 論文に詳しい。

Works Cited and References

American Psychiatric Association, *Diagnostic and Statistical Manual of Psychiatric Disorders*, vol. 3 (DSM-Ⅲ) Washington, D.C.: American Psychiatric Association, 1980.

Apocalypse Now. Dir. Francis Ford Coppla. Paramount, 1979.

Collins, Nancy. "A Legacy of Strength and Love" *Good Housekeeping* Nov. 1995: 113+.
Davis, Patti. *The Way I See It*. New York: Putnam, 1992.
The Deer Hunter. Dir. Michael Cimino. Warner Bros, 1978.
First Blood. Dir.Ted Kocheff. Anabasis Investments NV,1982.
Hamburger Hill. Dir. John Irvin. Paramount, 1987.
Herzog, Tobey C. *Tim O'Brien*. New York: Twayne, 1997.
Ikui, Eiko. "Reprogramming Memories: The Historicization of the Vietnam War from the 1970s" *The Japanese Journal of American Studies* 12 (2001): 41–63.
In Country. Dir. Norman Jewison. Warner Bros, 1989.
Jacknife. Dir. David Hugh Jones. Kings Road Entertainments, 1989.
Kamioka, Nobuo. "Support Our Troops: The U.S. Media and the Narrative of the Persian Gulf War" *The Japanese Journal of American Studies* 12 (2001): 65–81.
Kaplan, Steve. *Understanding Tim O'Brien*. Columbia: U of South Carolina P. 1995.
Mason, Bobbie Ann. *In Country*. 1985. New York: Perennial, 1986.
O'Brien, Tim. *Going After Cacciato*. 1978. New York: Delta, 1979.
—. *If I Die in a Combat Zone*. 1973. New York: Laurel, 1987.
—. *In the Lake of the Woods*. 1994. New York: Penguin, 1995.
—. *The Nuclear Age*. 1985. New York: Penguin, 1996.
—. *The Things They Carried*. 1990. London:Flamingo,1991.
—. "Vietnam in Me." *New York Times* Oct. 2 (1994): 48+.
Platoon. Dir. Oliver Stone. Columbia Pictures, 1986.

生井英考『ジャングル・クルーズにうってつけの日』筑摩書房、1987年
—『負けた戦争の記憶』三省堂、2000年
ウォイティッツ、ジャネット・G『アダルト・チルドレン』斉藤学監訳、金剛出版、1997年
上岡伸雄「メタフィクションを超えて—ティム・オブライエンの『本当の戦争の話をしよう』」『英文學春秋』第6号、(1999) 19－35
カルース、キャシー『トラウマへの探求』下河辺美知子他訳、作品社、2000年
下河辺美知子『歴史とトラウマ』作品社、2000年
ヌーバー、ウルズラ『「傷つきやすい子ども」という神話』丘沢静也訳、岩波書店、1997年
橋本安央「隠喩としてのヴェトナム—ティム・オブライエンの『失踪』」山下昇編『冷戦とアメリカ文学』世界思想社、2001年、276－304
ハーマン、ジュディス・L『心的外傷と回復』中井久夫訳、みすず書房、増補版、1999年

Tim O'Brien's *In the Lake of the Woods* as a Response to the Trauma Narratives in the 80s and 90s

Izumi MATOBA

The Vietnam War damaged the American myth of innocence, letting the public regard not only the government but also the U.S. soldiers themselves as victimizers of the war. Severe experiences in the battlefields and the cool treatment of the veterans after their homecoming caused many of them to suffer Post-Traumatic Stress Disorder. However, the movement of restoring their honor in the 1980s established their image as victims of war, trying to remedy their traumas, ultimately trying to remedy the traumas in U.S. society.

In the 80s, the movement of remedying the trauma of the Vietnam War prevailed in various fields of U.S. society, including the film industry. The image of U.S. soldiers and veterans as victims is repeatedly shown in the films of the 80s such as the Rambo series, *Platoon, In Country*, and *Jacknife*.

The 80s and 90s was a period when trauma narratives, not necessarily war trauma, boomed. The terms Adult Children as well as PTSD became widely known. The term Adult Children, originally Adult Children of Alcoholics (ACoA), means the people who find difficulties to thrive in the world because of the effects of the troubles they suffered in their families during their childhood. The boom in the trauma narratives, including those of Adult Children, stirred the

interests on treatment for trauma in the fields of psychiatry and clinical psychology, showing the possibilities that trauma could be remedied with the aid of such treatments of those fields.

As John Wade in the novel suffers both from PTSD and the traumas of ACoA, *In the Lake of the Woods*, which O'Brien started to write in 1990 and published in 1994, reflects the boom of remedying traumas in the 80s and early 90s. John himself had tried to overcome his trauma by obliterating his traumatic memory of his alcoholic father's suicide and his murder of two people in the massacre at My Lai. The novel, however, does not suggest the possibility of overcoming trauma. Not only did John failed to overcome his trauma, but also, the narrator, who was in My Lai as a soldier one year after the massacre, failed to clarify the mystery of John's disappearance. As a result of his pursuing the mystery, the narrator realizes that John is beyond knowing and so we all are.

Because John remains an absolute and impenetrable unkown, the narrator seems to give up integrating the fragmented information he gathered, and just seems to present the fragments. The novel consists of numerous fragments of evidence, hypotheses, and narrated stories. Readers, as well as the narrator, try to integrate these fragments in order to understand not only the mystery of John's eclipse but also that of wickedness in human beings, only to find it impossible.

Flashbacks as the fragments of traumatic memories, which have not been integrated fully in the person's consciousness, appear repeatedly like snapshots, demanding full integration and understanding of the meaning of the traumatic events. Therefore, unless the fragments are not integrated in his/her consciousness, they are not interpreted nor rationalized fully, attacking him/her as

flashback. They refuse to be obliterated. Since the fragments in the novel are not integrated in the readers' mind nor in the narrator's, we cannot interpret nor rationalize them fully. The fragmented traumatic memories of the massacre repeatedly force us to integrate them in our consciousness, refusing to be obliterated.